(6)-1明治

先見の明のあった喜多方の事業家により、養蚕業がおこり、蔵が増加する

喜多方で養蚕・製糸業おこる

小荒井村の小荒井小四郎は、東京の資本を背景にした近代的製糸工場の製造を計画し、郡内に200万本に及ぶ桑苗木の貸し付けを行った。これによりやがて耶麻郡は県内でも主要の繭生産地になった。また、彼が明治6年(1873)に開業した小荒井(喜多方)製糸工場は会津地方での器械製糸のきっかけとなった。しかし、明治末期には経済不況となり糸価が下落、零細企業は淘汰された。

鈴木組喜多方製糸所操業風景
(明治45年ごろの写真)

製絹合資会社の女工さん

(資料:図説喜多方の歴史)

(6)-2明治

大火から蔵の重要性が再認識される

醸造業や漆器業の作業場として蔵が建てられ、喜多方では蔵が増加しつつあった。

明治13年、町の中心部で170戸を焼く大火があったが、その中で蔵だけが焼け残っていたことから住人の蔵に対する認識が高まり、他の地方では珍しい蔵屋敷など、多くの蔵が建造されるようになった。郊外の岩月町三津谷では、レンガが焼かれ、レンガを使った蔵も多くなった。

明治16年には福島県令三島通庸（みしまみちつね）による会津三方道路が開削され、喜多方が新米沢街道の重要な経由地となった。(後の国道121号)

明治20年代の「大善呉服店」(上)
明治40年代の「大善呉服店」(右)

新仲町の「瀬野屋呉服店」明治末期

(資料：図説喜多方の歴史)

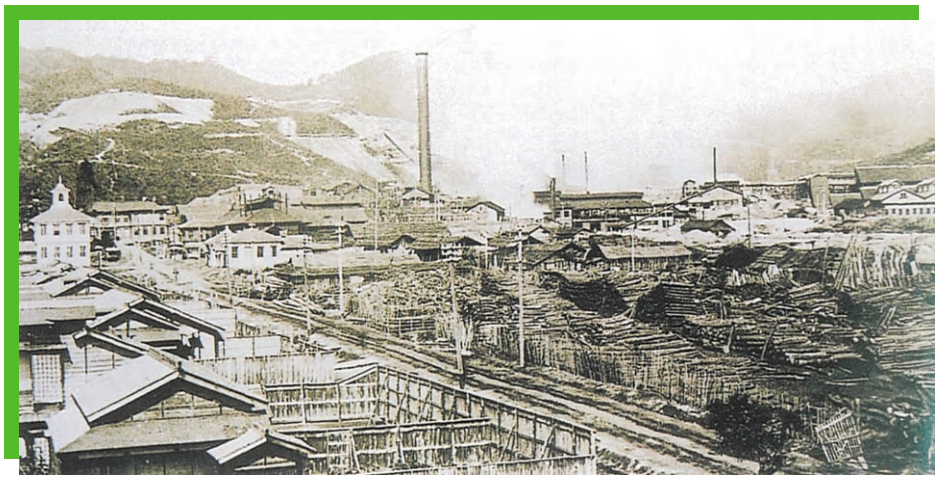
(6)-3明治

小荒井村・小田付村など５村が合併し喜多方町が誕生

明治８年に小荒井村・小田付村など5村が合併し“(北方)きたかた”の読みで「喜多方町」が誕生する。明治１４年、まちの人々の熱心な誘致運動により、耶麻郡役所が塩川から喜多方に移される。

また、明治３８年に加納鉱山(熱塩加納町内)が本格稼働され、一時期全国第三位の銅鉱山となった。人口3,000人を数えた鉱山町が喜多方町の消費地となったことから、この間は大変な好景気となって蔵の増大に寄与した。

明治１７年に再建された耶麻郡役所新庁舎



加納鉱山全景

(資料:図説喜多方の歴史)

(6)-4明治

まちの人々の運動により岩越鉄道が喜多方まで延伸

明治37年、私鉄として喜多方駅まで開業した岩越(がんえつ)鉄道によって、漆器や酒造、生糸などの主要生産物に外販の道が開け、生産が飛躍する。

岩越鉄道は、喜多方を通過しないルート案も出されたが、官民一致の運動と資金提供により、喜多方を経由する延伸が実現した。

喜多方水力電気株式会社は、喜多方町外3カ村への電力・電灯の供給を目的として設立され、明治33年9月に大塩川の水を利用した北山発電所を建設、翌年11月に開業した。

喜多方駅(左)

開通した
喜多方駅前通り(下)

(資料:図説喜多方の歴史)